社会復帰を目指すニートがまちづくり活動を手伝う	面談年月
NPO 法人ニュースタート事務局　二神　能基氏	H18 年 2 月

《活動のフィールド》
千葉県市川市をはじめ、全国

H6　ニュースタートプロジェクト実施
　（イタリアに不登校や引きこもりの若者を送る）
H11　浦安にミーティングルームを設立、NPO 認証
H17　厚生労働省から若者自立塾の実施団体として認定

活動内容

千葉県市川市を中心に、全国を対象として、ニートの就労支援を行う NPO を主催。主には、

- ○　同世代が訪問し、人と関わるきっかけをつくる　（訪問部隊）
- ○　全国各地からやってくる仲間と共同生活する　（若衆宿）
- ○　福祉・地域・飲食・情報 IT などの様々な分野を同時期に複数体験できる　（仕事体験塾）

という3つの活動を通じて、ニートが人との接し方を学び、繋がりをつくり、自分がしたい仕事を見つけることを目指す。ニートが自分にはできないことを努力してこなす事も大切だが、できないことを共に活動する人にお願いする、そうすることが人と接するきっかけにもなり、次の活動へのステップアップに繋がる。

平成 17 年度全国都市再生モデル調査では、団地の空き店舗の再生を試みた。このように、ニートの自立を目指すため、多様な活動に取組んでいる。

「都市再生の担い手」として事務局が注目した発言等

- ○　NPO は、Non Power Organization になってはならない。
- ○　NPO は財政基盤が必要であり、これをポリシーにしないと NPO は継続できない。
- ○　「家族を開く」ということをコンセプトに活動している。
- ○　ニートの若者が社会で仕事をしていくには、仕事のルールと最低限のコミュニケーションを覚えるだけでは不足。人の繋がりも知る必要がある。

（写真1…お遍路）

（写真2…ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽを実施）

（写真3…ﾊﾟﾝ屋を運営）

（写真4…ﾕｰｽﾎｽﾃﾙで就労体験）

（写真5…保育園を開設）

（写真6…ﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄを実施）

インタビュー概要

(活動内容についての説明)

① 活動の経緯

- NPO 法人ニュースタート事務局は、平成 6 年 9 月に不登校や引きこもりなどの若者をイタリアへ送った「ニュースタート・プロジェクト」が起点。これは、学校や他人との違和感のため人間関係が築きにくくなっている若者たちが、イタリアの農園で共同生活をおくる事によって、人と人との繋がり方を再構築するに至る試み。
- 二神氏が日本の社会のセーフティネットとなる部分の整備が遅れていると痛感し、経済的に自立した組織的な受け皿の設立を目指した。
- 平成 11 年に NPO 法人格を取得した後、国内にも若者達が共同生活を体験できる寮(若衆宿)や、仕事が体験できる場所(仕事体験塾)としてデイサービスセンター、託児、何でもお手伝い屋、喫茶店、パソコンを使った IT 事業部を立ち上げている。若者のニュースタートを応援する人間ネットワークづくりを主な活動としている。

② NPO 組織について

- 二神氏は浦安に住んでいるが、NPO 設立当初は、NPO 法人への理解が乏しく、浦安に賃借できる物件が見つからなかった。行徳で偶然見つかった物件を賃借している。
- NPO は責任が不明確。ニュースタート事務局も代表である二神氏の個人印で契約を結んでいる。誰がキーマンなのか見えない組織が問題なのだろう。会社は分権型の組織なので、担当部長などが契約出来るのだが。保証は全て二神氏の個人もち。他の理事は責任を負わなくて良いようにしている。
- NPO の意思決定について。理事は外部の信頼できる友人を選んだ。選ぶ際には、高い見識と、高い志で泥沼をかき回すことへの理解を求め信頼を得ている。市民型 NPO によくある合議制を採用すれば、大胆な決断が出来ない。ワンマンで決断できる仕組にしたことで、幅広い活動が可能となった。

③ ニートの若者について

- ニュースタート事務局は、かつては受け入れているニートの若者が 10 人ぐらいで、ドラマの 3 年 B 組金八先生のような組織だった。今やニートの若者が 100 人ぐらいになり、同じように膝を突き合わせての付き合いは出来なくなってきている。
- ニュースタート事務局も平成 17 年から違う段階に来ていると感じている。社会の仕組に役立つ活動をしたいと思っている。二神氏が若者と必死で語り合う時代は終わったと思っている。自分たちが出来ることは、ニートが社会での役割を果たせるように、社会に出て行く方法ではなく社会での生き方を示していくことだと考えている。それは、ニートの若者がサラリーマンになることではなく、特性を活かして自営業をすることだと思う。
- ここに来ているニートの若者から、「人付き合いは今も苦手であるが、人間は嫌いでなくなった」と聞いたとき、大きな成果があったと思った。いろいろな人間を認めることができるようになったことであり、これができれば社会生活は継続できるからである。
- ニュースタート事務局では、ニートの若者が社会に出て行けるようになるまでに、平均 1 年 3 ヶ月の期間が必要。昔の旧制高校のように無駄な時間が大切である。
- ニートの若者が社会で仕事をしていくには、仕事のルールと最低限のコミュニケーションを覚えるだけでは不足。人の繋がりも知る必要がある。
- 新規プロジェクト (注:ニュースタート事務局ではニートの若者の自立支援のためプロジェクトをニート自身が企画立案・運営) では、若者に提案しろ、可能性を追求しろと言っている。特に、事業性を確保するよう厳しく言っている。
- ニートの若者だけでは、体験・人脈が不足してしまい、実現に至らない場合が多い。若者たちだけでは、同じ欠点を持ってしまう。この若者の欠点を補うサポート役が必要。二神氏らはニートの行う事業の間を埋め

る作業しかしないので、役所との折衝もなかなか上手くいかない。役所の体質が見えないようだ。だが、ダメもとの考えで取組んでいるし、若者にも経験を積んで貰いたい。（このように言っているが、二神氏はしっかりと陰でフォローしている）

【 質 疑 】

○：二神氏　　●：事務局

●ニュースタート事務局は、「地域のため」ということを活動の主眼に置いているのか？

○どちらとも言えない。現実に、サラリーマンに向かない若者がいる。社会に新たな自営業を作れないかと考えている。親父の退職金と母親の愛情を使って、コミュニティビジネスが作れるのではないのか。行政の借金が膨らみ、今後は行政の出来る領域が小さくなっていく。これは新たなビジネスのチャンス。

●行政とはどのような関係で接しようとしているのか？

○（我々の）NPO は、行政に助成金を求めていない。行政の厳しい台所事情は知っている。千葉県では 2 兆円の借金がある。そこで、考えねばならないのが、NPO は市民の側、行政の側、どちらの側に立つか。行政は市民に強く当たらざるをえないのだが、市民の方は行政に何でも求めがちで堕落しているのではなかろうか。市民と NPO には距離がある。

●地縁組織との関係は？

○町内会のような地縁型組織とは協力していない。市民の困ったところは、町内会を使って行政とすぐ話したがるところ。

●NPO と地縁組織の関係を築くことが求められているが、理念どおりに上手くいくのか？

○理念は分かるが、現実の人同士では上手くいかない。行徳のニュースタート事務局でも、近所のコンビニや美容院と協力体制が作れるまで 5 年もかかった。資本主義社会で理念はどこまであてになるのか？　多くの NPO の持つ抽象的な理念ではダメ。経済的な必然性がないと物事は始まらない。

○具体的な活動を通じて触れあうからこそ、新たに住みだした住民が多い地区の悩み解決ができると考えている。例えば、パン屋を開いて、一緒にイベントをする。我々の実行力を見せれば、地域や地縁組織からも認められると思うし、そうしたところから、つながりを深めていくしかない。

●地域と関係を持つため、取組んでいることは？

○このような活動(コミュニティビジネス)を広げていくことでリーダーがそこからうまれ、地域との連携も始まる。コミュニティビジネスを仕組にした方が良い。場合によっては制度化もあり得る。今は、具体的な活動を通じて触れあうからこそ、新住民が多い地区の悩み解決ができると考えている。小さな活動から、つながりを深めていくしかない。

●ニートの若者は、どのようなことを求めているのか？

○よく分からない。ただ、ニートの若者は世の中の役に立ちたい願望が強いが、お金が欲しいというわけではない。

核家族で固まるよりも、色々な世代の交流があった方が良い。人の助けは借りないと考える人も多いが、迷惑をかけあい、人間関係を作った方が良いと思う。

日本にはサラリーマンが多すぎるように見える。ただ、ニートの若者はサラリーマンが出来ないので、儲からない自営業をした方が良い。もうからない自営業でも親の支援があればやっていける、パラサイト自営業という形もある。人口減少がすすむので、儲かる確率が低くなるのもこの考えの一因。

●他の NPO との関係は？
○地域では圧倒的に NPO が不足している。仲間を掘り起こしたい。

●これまで、団塊の世代がニュースタート事務局を手伝ってきたか？
○団塊の世代の方々が、これまで行徳のニート支援の活動に来たが噛み合っていない。企業で揉まれてきた人と、ニートの若者の言葉が噛み合わないからだ。そのため長続きはしていない。企業退職者には、活動の枠や仕組み作って与えないと若者と一緒には仕事ができない。

●団塊の世代が地域で働くための工夫は？
○団塊の世代が地域で働くには、地域で活動することへの明確なミッションを与えることと、会社と地域の間にワンクッションが必要。NPO はひとつの仕組だが、もう少し違う仕組も要るように思う。ただ、会社とボランティアは違うし、仕組だけでは人の気持ちは動かない。このままでは、2007 年には大量の団塊世代の引きこもりができる。団塊世代の能力を活かす仕組みをつくらなければならない。

●公務員 OB は活用出来るのか？
○役所の感覚が分からないので、公務員 OB を活かしたい。今後は行政との協働が増えていくので、活躍の場は増えていくハズ。